The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	留学生を対象にした書道授業の報告 ： 平成15年からの17年間をふりかえって
Author(s)	福光, 敬子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2020, 18, p. 33-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75889
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

留学生を対象にした書道授業の報告
―平成15年からの17年間をふりかえって―

The report of Shodo classes for foreign students:
17 years' recount from 2003 to 2019

福光　敬子

【要旨】

筆者はこれまで、大阪大学日本語日本文化教育センターにて、17年間、合計66クラス分の「書道」の授業を担当してきた。「書道」の授業は、「日本歴史文化学研究基礎」と「漢字・語彙」という分類に属し、受講生は、日研生、それ以外の留学生、大学院生、人間科学部学生（日本人を含む）であり、彼らの所属や文化的背景は実にさまざまであった。

本稿第一章では、まず受講生の出身国を地域別に整理し、受講生の数の推移を調査した上で、これまで行ってきた「書道」の授業の実践内容、成果などを細かに分類し、分析する。

そして第二章では、留学生に適した「書道」の教授法と、教材（2005年に教材叢書『留学生のための書道入門篇』、2017年の『発展篇』）作成について述べる。

最後に第三章では、受講生の感想文から、彼らの「声」を整理する。実技に強い関心を寄せる学生、「書」作品が題材とすることばや文学、歴史に惹かれる学生、自己表現を好む学生、「書く」という行為から高い精神性を見出した学生など、「書道」を通して抱いた感想は、実に多岐にわたった。彼らの関心から、日本国外から見た「書道」とその特質を探り、今後の国内・国外での「書道教育」につなげてゆくことが本稿のねらいである。

はじめに

「留学生に何を教えるべきか」、これは授業担当初年度より、ずっと考え続けてきたことである。まずは、「日本人学生に書道を教えるのと同じでよいのか」、この疑問が先に立ちはだかった。外国人に書道のワークショップや講演、講座をした経験があるとはいえ、2003年に大阪大学（当時は大阪外国語大学）の留学生の書道クラスを担当すると決まった際、担当の先生にお尋ねした。「日常の日本語を書く文字を美しくすればいいのでしょうか？（＝実用書）芸術作品を制作することを目標として実技を教えるのでしょうか？（＝芸術書）書道作品を鑑賞したり、書道の歴史を講義したりするのでしょうか？（＝書道史・書道理論）漢字や平仮名の成り立ちなどで書道に関連する部分を教えるのでしょうか？（文字学・漢字学、日本文化論など）と。先生の回答は「すべてお願いします」であった。かつ、日本語レベルの初級から受け入れてほしい、とのことであった。

本稿は、出身の地域、書道の経歴、年齢、文化、すべてが違う学生たちに「書道」を教えるために試行錯誤した17年間の授業内容を記録したものである。本稿の第一章では、主に受講生に関する調査報告を、第二章では、外国人を対象とした場合の「書道教育（教材と授業）」についての詳細を記す。そして第三章では、学生たちから得た「声」をもとに、今後の国内外での「書道教育」の可能性を探るべく、改めて日本国外から見た学生たちの「書道」を浮き彫りにしてゆく。「書道」の授業を通して学生が見た「書道」から、「書道」そのものの特質を探り、今後の国内外での「書道教育」につなげてゆくことが本稿のねらいである。

第一章　受講生に関する調査及び学生による授業評価

2003年から2019年の春～夏学期まで、大阪大学日本語日本文化教育センター（CJLC）にて、840名の留学生を対象にした「書道」の授業を担当した。合計すると、66クラスであった。

１．受講生の所属

受講生は主にCJLCの学生であったが、大阪大学外国語学部、人間科学部、経済学部などの学部生や大学院生も含まれた。CJLCの学生に関しては、９月に来日し秋～冬学期を受講する者、春～夏学期のみを受講する者、或いはその両方を受講し帰国する者に区分された。留学プログラムに関しては、日本語・日本文化研修留学生プログラム（J）と、メイプル・プログラム（M）の学生が主であったが、年度によっては、学部留学生プログラム（U）や、海外で日本語教員をしている者が対象のＴプログラムの受講生もいた。なお、１クラスあたりの平均受講者数の最多は28名、最少は２名であり、平均すると13名程度であった。

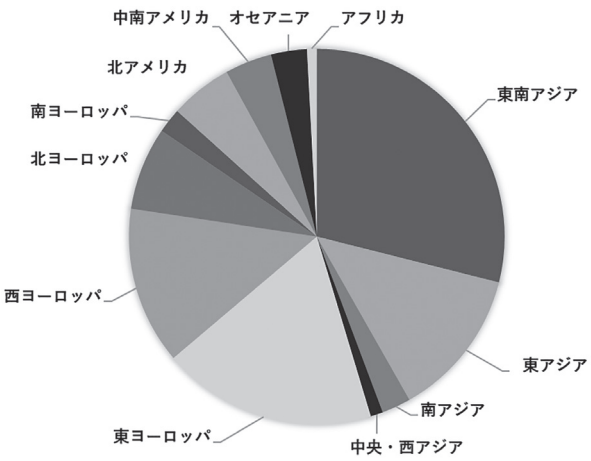
２．受講生の出身地

17年間の書道クラス受講生は、総勢840名であった。本節では、すべての受講生の出身地を地域別、さらに国別に分類することを試みた。

（１）地域別分類

アジア出身者の中には、漢字を使用する中国、台湾、香港が含まれる。また過去に漢字を使用していた韓国、中国人の祖先をもつベトナム、インドネシア出身の学生もいた。さらに南米ブラジル出身者には、日本にルーツをもつ学生も少なからずいた。

本項では、全受講生を地域別に分類し、グラフ化した（下図 円グラフ）。このグラフを見れば、アジアの中では東南アジア出身者が多くを占めていたことが分かった。この東南アジアの半数以上が、タイ出身者であり、４分の１がベトナム出身者であった。



タイ	125	オランダ	11	ペルー	3
ベトナム	59	スウエーデン	11	イスラエル	2
ロシア	38	フィリピン	10	スリランカ	2
中国	35	ニュージーランド	10	エストニア	2
ポーランド	34	カナダ	8	チュニジア	2
ブルガリア	34	フィンランド	6	キルギス	1
フランス	34	日本	5	アラブ首長国連邦	1
USA	34	ルーマニア	5	シリア	1
UK	32	香港	4	アゼルバイジャン	1
台湾	29	モンゴル	4	イラン	1
韓国	28	マレーシア	4	スロバキア	1
ハンガリー	26	チェコ	4	クロアチア	1
ドイツ	26	デンマーク	4	アイルランド	1
ブラジル	26	スペイン	4	ノルウェー	1
インドネシア	25	リトアニア	4	パナマ	1
オーストリア	17	エジプト	4	ベネズエラ	1
スイス	16	トルコ	3	ドミニカ共和国	1
インド	15	ネパール	3	アルゼンチン	1
オーストラリア	14	シンガポール	3	チリ	1
イタリア	13	ベルギー	3	パプアニューギニア	1
ミャンマー	12	ラトビア	3	南アフリカ	1
ウクライナ	11	メキシコ	3	不明	14

ヨーロッパでは、東ヨーロッパと西ヨーロッパ出身者の人数差はあまりなく、南ヨーロッパが些少であった。

（2）国別の分類

さらに国別に分けて受講人数を調べると、表（右表）の通りとなった。漢字文化圏出身者と非漢字文化圏出身者に区分すると、漢字文化圏出身者の受講生は一定数いるものの、受講生多数の上位三ヵ国には入ってはいなかったことがわかる。

漢字文化圏出身者（中国、香港、台湾）は全体の受講生数の約８％を占める。

３．漢字文化圏/非漢字文化圏出身者の「書道」学習体験の相違

「書道」の受講生は、漢字文化圏出身者や漢字文化圏の文化に親しんでいる学生と、そうでない学生に大別される。両者の間には、漢字文化や書道に関する基礎的知識の差が大きいため、初年度の授業では、授業方法にも彼らの差を埋めるような工夫が必要であるように感じられた。しかしその後の授業では授業中の配慮も特に必要なく、学生全員が書の古典を学ぶこと、書作品を制作することを目指していたことが、授業後のコメントにて多く確認できた。

本クラスでは、各学期の最終授業に、受講生全員に各自制作した書作品をもとにしてプレゼンテーションを課していた。さらに、プレゼンテーションの為の原稿はあらかじめ準備させておき、それをレポートとして提出させていた。これを学生の「声」として、以下いくつか取り上げてみたい。これは、漢字文化圏出身者と非漢字文化圏出身者の「書道」学習体験の相違を見極めるためである。

◆非漢字文化圏出身の受講生の声

- 私にとって書道を体験することは全体的に難しいことでしたが、すべてが斬新的な魅力がありました。授業の内容に沿いながら、どんどん新しい知識を得ることができました。驚いたこと、感動したことは数えきれないほど多いですが、身をもって体験したことが一番でした。専門の本を読んだり、論理的な説明を聴いたりすることよりも、実際に積極的な気持ちで筆をとって、墨を磨って、清らかな心で納得いくまで書くことは成功の秘訣だということが、体験から分かってきました。〔中略〕「道」のもうひとつの土台石は、口で教えてもらうことではなくて心で感じて流れに従いながら、自分の体験から学ぶことです。〔後略〕（2010　ブルガリア　Kさん）
- 書道というのは人々が精神から創り出した芸術である。だれでも感情があり芸術を楽しめる心がある。書道はただ美しいだけではなく、心の窓ともいえるでしょう。作品に書く人の気持ちがみられるものもあれば、見る人のために何かを与えるということもある。今回は前期と違って難しくなった。書き終わった時の感情は何とも言えないような気分だった。書きながら精神の栄養に役立つことが分かってきた。字を書くことで気分が活発になるし、普段味わえない世界へ旅立つことができる。（2014　ミャンマー　Eさん）
- 文字を書くことが芸術になることは発見でした。１つ、２つの文字だけで意味があり、字のバランス、線の太さ、スピード、それぞれが全部意味があるということも分かって、すばらしいな、と思いました。最後の作品は部屋の壁に掛けました。それからはその作品を

見るたびになんとなく落ち着けて、つい、よく見ていました。ただ白い紙と黒い線なのに、すごいな、と思いました。二つ目に発見したことは、手書きが下手な人でも、書道を楽しめることです。書道は決まった形の美しさではないからです。日本での一生忘れられない思い出になりました。(2016　タイ　D君)

- 私にとって一番楽しくて勉強になったのは、漢字の成立についてであった。成立から覚えるのはそれまで知らなかった。とても効果的な学習法だとわかった。漢字文化圏の人ならそれは当然なのかもしれないが、それ以外の人なら、当然ではないだろう。自国では漢字学習を目標とする授業がないので、学生は漢字を覚える方法を自分で工夫しなければならない。それは効果的とはいえない空で覚えることが一般的といえるだろう。(2016　ハンガリー　Vさん)
- 私にとって日本語の一番難しいところは漢字です。書道を体験してから漢字を違う方法で見られるようになりました。それまでは複雑で線がたくさんある字として見ていましたが、今はどうしてこうやって書くのか、このように見えるのか。まだまだ字源などは詳しく分かりませんが、しっかり見ながら味わうようになりました。覚えやすくなってきていると感じています。また、「昔の日本人はこうやって書いたのかな？手紙をこうして書いたのかな？書きながら何を感じていたのかな？気持ちはどうだったのかな？」と考えています。(2017　ロシア　Aさん)

◆漢字文化圏（中国・台湾・香港）出身の受講生の声

- 書道の宿題をする時は、いつも書道以外のことを考えられなくなり、不快なことはしばらく全部忘れることができ、スッキリする感じもよくします。〔中略〕小学校のころ習った中国での書道とちょっと違う気がします。日本の書道は、曲がる所も柔らかく感じ、連綿も細かく見えます。私はそういう柔らかいところが好きで、漢字より仮名を書く方が好きです。(2014　中国　Cさん)
- 平仮名は中国の漢字から生まれたのは知っていましたが、漢字の書き方と、平仮名の書き方を結び付けて習うことは、考えませんでした。(2014　香港　Rさん)
- 漢字の由来や変体仮名についてたくさん教わった。中国人でありながら漢字の歴史について何もしらないことを感じた。一つの漢字に一つの論文が成り立つほどその由来というのは本当に豊富なもので、これからは漢字を焦らず一つ一つ見ていきたいと思った。(2015　中国　Jさん)
- 子どもの時の中国の書道へのコンプレックスと暑苦しい印象はまったく覆りました。もともとの形にとらわれず、気持ちが変化していき、生命力が湧きました。中国の書には重くて荘厳なものがありますが、日本のは軽くて美しさが目立っているようです。そして、中国の書には個性的な体臭というものが強く表れていますが、日本の書では、もの柔らかい感覚的な味を求めていきます。(2016　台湾　F君)
- 書の鑑賞について。最初は「何が書いてあるのか」に関心がありましたが、もっと勉強したら「どのように書いてあるのか」に関心が移りました。書く速さと書く強さによって、全然違う雰囲気になりますが、これは前には考えないことでした。阪大の「まちかね祭」で、書道部の学生たちが音楽を聴きながら音楽が伝えたい気持ちを書道で表現するのを見

ました。とても美しかったと思います。授業で習った年賀状を送ったら、嬉しい、って言われて私も嬉しくなりました。この授業で書道の印象はまったく変わりました。書道を続けて、人を幸せにするつもりです。(2017　台湾　Yさん)

- 今までの書道のイメージはつまらなくて、ただ字を書き、毎回手を汚す。ところが今回始めてみたら、全然そうじゃないと思う。今は毎回授業で手を汚す方が面白いと思う。日本文学の授業で『源氏物語』を読んだが、書道の授業の内容や精神に繋がる。平安時代の貴族の生活や、その後遺した文学作品にも繋がる。日本文学の勉強にすごく役に立つ。そのほか、教科書の中の「雪月花」「一期一会」など、中国語で存在しない言葉も見つかった。「一期一会」は書道の状況の典型と考える。書道作品のいいかどうかを判断する力は、すごく悪いと思うが、美術館で書道の作品もちゃんと見るようになった。今まではまったく書道に対する興味がなくて、わざとスキップしていた。今、書体で一番すきなのは、行書と隷書。草書はまだ好きになっていない。いい作品を見つけて、好きになったらいいな。まとめると、書道で勉強したことは2つ。「心の静かさ」と「字にだけ専念すること」(2018　台湾　Yさん)

第二章　外国人対象の書道教育について

1．教材作成：テキスト『留学生のための書道　入門篇』(教材叢書、2005年)

本校での書道講座実施にあたり、全員が使用できる、比較的容易な書道のテキストが必要であった。そこで2005年に執筆することとなった。それは、大阪外国語大学留学生日本語教育開始50周年記念と、独立行政法人日本学生支援機構設立記念として開催された「日欧国際シンポジウム　欧州における日本語日本文化教育の展望　―欧州と日本との教育的連携を目指して―」(於東京国際交流館プラザ平成/大阪国際会議場)に参加するため来日される日本語教育の先生方へのお土産とすることになっており、急いで作成してほしいという依頼であった。こうして執筆したものが、テキスト『留学生のための書道 入門篇』であった。本書の特色を紹介するため、以下、「はじめに」の一部を抜粋する。

〔前略〕できるだけ初心者でも楽しめるよう、簡単な一字の作品例を多く示しています。一字であっても、深い意味を持つ言葉を選びました。それを美しく仕上げれば、それは立派な書作品となります。書道の指導においては、知らず知らずのうちに指導者が自分の書風を押し付けかねません。そうならないために、それぞれの書例(手本)には、基盤になっている古典作品を明示しています。更に深く学習する場合には、示されたその古典名からより詳しい資料を入手し、臨書を進めることができます。〔中略〕また、これらの学習は、書道作品制作だけでなく、日本の古典文学の原本や、美術作品の画賛など、漢字の行書、草書、変体仮名などが読めれば、どんなにいいだろう、と思っている方々への最初の第一歩になることでしょう。

図版を多用し、目で見てわかりやすい入門書になるよう心掛けた。時代、地域、書体、書風、それぞれに偏りが出ないように留意した。以下、その一部の図版を抜粋して記載する。

なお、『入門編』は大学から受講生全員に配布された。そのため、受講した学生は帰国後その

テキストをクラブなどで共有し書道の指導をおこなっている報告を何度も得た。

【図版例】

図 1

図 2

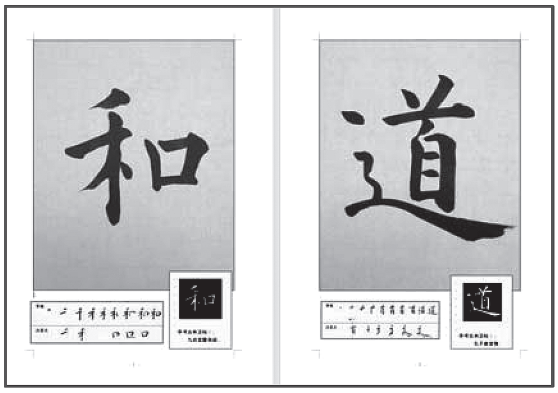


図 3

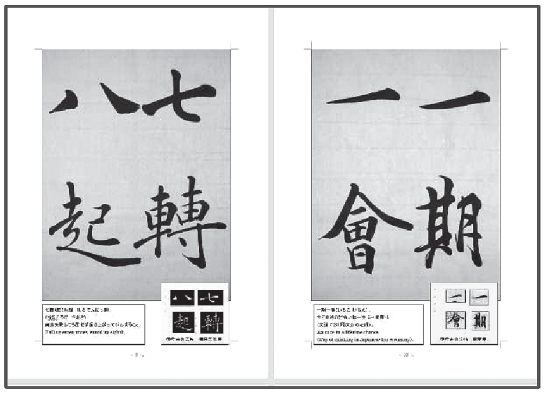


図 4

2．教材作成：テキスト『留学生のための書道　発展篇』（2017年）

『入門篇』に続き、2017年に『発展篇』を制作した。授業では白表紙のテキストとして、再受講の受講生に配布して授業内で活用した。本テキストの特徴も、「はじめに」より抜粋して紹介してみよう。

本書は、日本に来た留学生が、前篇の「書道　入門篇」で書の基本を学んだ後、さらにその技術や知識の幅を広げられるように作った、より実践的な教科書です。端的にいうと本書は、学書者が古典の書法をしっかりと体得し、そのままスムースに作品制作へと移行できるようになることを主な目的としています。〔中略〕手書きの参考手本を載せており、また、その手本のもととなった古典作品からの「集字」と用語の解説、コメントなどを付しています。ですからこの一冊で、臨書学習ができますし、アレンジを加えて作品を制作することもできます。参考手本は、金文、漢碑をはじめ、王羲之、唐代の楷書、懐素、米芾、黄庭堅、王鐸、傅山など、古代から近世に至るまでのあらゆる名品から字を集めました。書の技術向上に役立つもの、作品として見栄えがよくなりそうなものを厳選しています。漢字がどのように生まれ、現代用いられる楷書、行書体に至ったのか。本書を通して字源やその周辺の文化に関心をよせてもらえればとも思います。〔中略〕帰国後の留学生から、なかなか自国で書道を学ぶことができない、という声を多く耳にしてきました。各自の興味や能力に応じて、自身がいろいろな側面から書道にアプローチしていけるように、また、帰国後も書を一人で学べるようにというのも、本書のねらいです。〔下略〕

図 5

図 6

図 7

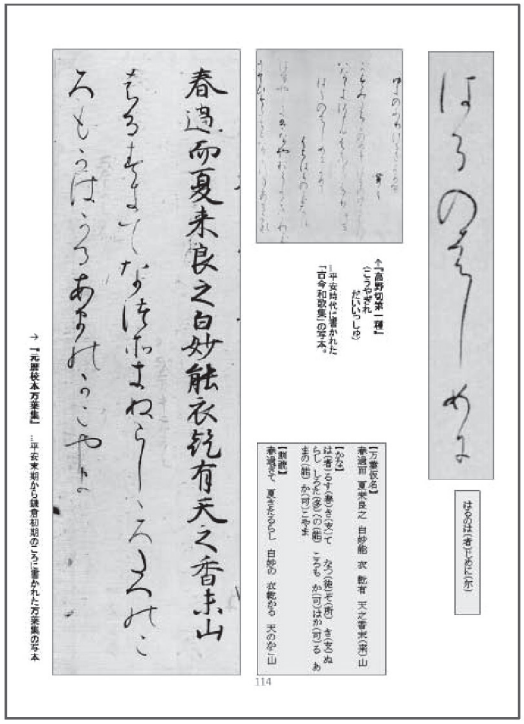


図 8

日本の学校教育における「書道」は、小・中学校では「国語科（書写）」に属する。一方、高等学校では芸術科に属し、音楽、美術とならんで書道が位置づけられる。前者は、「正しく」「整えて」「速く」書いても崩れない字を書くことが求められる。つまり日本語を使って自らの意思を正確に伝えることが重要視されるのである。一方後者では、「書道」を「芸術」としてとらえるため、「書道」を介した表現力や鑑賞力が重要視される。そこで書道史上、名筆と言われている古典名跡を「臨書」したり、それをもとに「創作」することが必須となる。

本来書道作品は、文字の造形性と意味性により成り立つ。しかし、名品のなかには、文字の造形性のみに意識を向けたものもある。しかし本テキスト制作にあたっては、書作品にあらわれた言葉からさまざまな思いが想起され、色々な情景が思い浮かぶような、そういった内容の字句を意図的に選んだ。これは『基本篇』においても同様である。撰文には、小学校低学年で習うような、比較的容易な漢字も敢えて多く取り入れた。例えば、「十人十色」「日月」「月光」「山水」などである。画数が少ないので、日本では中・高生以上が撰文し書作品としてしあげることは少ないが、意味は深淵であり、想像を広げやすい。また本テキストで扱った書体、書風は多岐にわたり、それぞれ一字一字が古典に立脚している。その古典の図版を併せて載せていることがこの教材の特徴である。

3．実際におこなった「書道」の教授法

（1）授業科目

- 日本語実習科目「漢字・語彙（KV）」の学習として提供されている「書道」の日本語レベルは中級以上と限定されており、実際にはＪプログラムとＭプログラムの学生が受講する。
- 研究科目「日本歴史文化学研究基礎（HIS）」としての書道の授業は、日本語レベルの限定

はなく、他学部にも、講義の使用言語が英語・日本語の授業として提供されるため、箕面キャンパスのみならず、豊中、吹田キャンパスの経済学部、工学部、文学部、人間科学部などの留学生や日本人学生が加わる。中には大阪大学が提供している英語だけの授業を受けている留学生もおり、その場合、筆者の「書道」授業は貴重な日本語での受講体験になる。

- 内容的には、その時の受講生の日本文化理解度、日本語能力により、適宜考えなければならない。日本語・日本文化の理解度が高い学生が多い場合は、実技よりも講義の割合が多い展開となる。シラバスはほぼ同じものを提示している。

（2）秋～冬学期と春～夏学期　（1クラス：平均15名前後。）

・秋～冬学期（10月開始）受講生は書道初受講。

・春～夏学期（4月開始）受講生は、前秋～冬学期の授業を修了した者も受講する場合がある。それぞれに対応した授業をおこなう必要がある。

秋～冬学期の授業内容例（全15回）

週	座学 （4週目からは最初の30分）	実技	宿題	紙
1,2,3	書道の概説 片仮名の成立、漢字の起源 実用としての書法 書道の道具について 五書体による実作の鑑賞 書道史概説			
	硬筆の練習プリント（参考手本は毛筆書） 連綿仮名の読み解く。 現代の毛筆手紙文を読み解く。 俳句、和歌、詩歌を読み解く。	プリントの始め部分のみ硬筆 （ペン・鉛筆）練習	プリントのつづき 読み解いて書く練習。	
4	書道道具を大学より貸与。消耗品の購入。 墨、筆の扱い説明。	墨をする。基本点画。「木」まで	毛筆宿題開始。基本、木。	半紙
5	教科書配布、教科書内容説明	A：楷書1字書	基本、木、A：2枚ずつ	半紙
6	仮名の字母確認 いろは歌の解説 変体仮名読み	B：行書1字書	木、A，B：2枚ずつ	半紙
7	いろいろな書作品（漢字、仮名）の紹介・鑑賞 草書、篆書の解説	C：2字書、4字書 いろは　練習開始	A，B，C,いろは：2枚ずつ	半紙
8		D：教科書より自由に 年賀状、カルタなど	A,B,C,D,いろは：2枚ずつ	半紙
9	書作品の表現・鑑賞「線について」	一字書作品を完成・押印 C,D作品の練習、	〃	半紙
10	小画仙紙作品X：作例（手本）を掲示し、説明の後、学生は選択し、練習開始。	色紙作品を完成・押印 X：作品の練習開始	最終作品Xの練習	色紙 八つ切り
11	小画仙紙作品Y：大きく行書（2字）作例（手本）を掲示し、学生は選択し、練習開始。	X：作品の練習継続 Y：作品の練習開始	最終作品X・Yの練習	八つ切り
12		〃	〃	八つ切り
13		〃	〃	八つ切り
14	作品選別（鑑賞）、押印、仕上げ			仮巻
15	発表会（作品とプレゼンテーション）作品説明、感想、質疑応答			

春～夏学期

・展開は秋～冬学期と同じであるが、具体的な内容は変える。
・再受講生には『発展編』の教科書を配布する。
　１～３：秋～冬学期と同じ内容
　４～13：①テーマを１つに絞り完成度の高い作品をめざす。
　　（例：『蘭亭序』や『風信帖』の全臨、また、大きな画仙紙を使用するなど）
　　②教科書から数多くの書例を選び、豊富に体験する。
　　①か②のいずれかに決めて、最終作品を仕上げる。
　14，15は秋～冬学期に同じ。

◆留意事項：

・仮登録期間に、この授業は宿題がとても多いこと、半紙など消耗品は個人負担になること、硯、文鎮、下じき、抱え鞄は大学からの半年間貸与であることなどを告げておく。
・秋～冬学期は来日当初であるため、できるだけゆっくり、やさしい日本語で、板書も併用して反応を見ながら、親切でなければいけない。時として英語が必要である。
・毎回、個別に宿題の添削を行い、必ず上達させる。

◆授業にあたっての工夫

・2003年に書道道具セット（硯、文鎮、下敷き、プラスティックケース、抱え鞄）は、25名分大学が用意した。その後、いくつかの鞄の破損があり、買い替えをした。
・消耗品の購入は個人の負担であり、個人所有で使えるものは使う、購入希望者は事前に申し出て、毛筆開始時（第４週）に教室にて購入。（その際の価格は仕入れ値（税込））
・教室は当初、汚れることを懸念し、CJLCの建物ではなくB棟の普通教室を使用していたが、しばらくしてCJLCの1313教室となった。ホワイトボードでなく緑の黒板があることは理想的であった。板書にて毛筆指導をする場合、そっと入る起筆や、消えていく収筆、また連綿する線などは、ホワイトボードでは表現しづらく、黒板にチョークで書くことによって伝えやすくなる。
・教室の２人掛けの横長テーブルを一人で使用するため20名余を限度としているが、強い要望によりそれ以上を受け入れたことも数回あり隣室からの机借用もあった。
・実技の授業では２脚を合体させ、学生は向かい合う形をとる。机間を回り、書いて見せる、注意するなどの指導の際、二人を同時に見せることができる。また、お互いから学ぶこともある。最後の条幅作品になると、紙が長くなるので、この２脚を合体させる方法か、学生が机の横に立ち、机を縦長に使う方法か、あるいは床で書くか、という選択になる。
・夕刻の授業（第４時限、５時限）であり、疲労も見受けられるので、90分に３つの内容を行い、充実した内容を目指し、座学の部分も質問を投げかけ参加型授業を心がける。
・授業の始めに、その日のメニューを板書し、説明する。宿題も同様。
・学期の後半は最終回までの流れを板書し、自覚を促す。
・宿題提出物、授業内制作物は、毎回全員分を黒板にマグネット展示し、相互に作品を鑑賞するチャンスをもうける。

・秀作を学内に展示するには、２階のエレベーター前にある移動式ホワイトボードの両面を借用して前後を対にしてぶらさげる方法を取った。今後、展示スペースの妙案が出ることに期待する。
・筆の管理方法（洗う場所、洗い方、保管方法など）を徹底し、筆をCJLC建物内で洗うこと、墨液を流すことは厳禁した。
・紙は、授業内容によって異なる。半紙、小画仙紙（全紙の八つ切り）、色紙、料紙（仮名の清書用）、年賀状用画仙紙ハガキ、短冊、半切の画仙紙、掛軸仮巻、など、学生は自分で入手することが困難であるため、授業内容に沿って用意し、授業中に教室にて各自代金を支払い、購入するという方法をとった。
・作品の最終仕上げとして、書下ろしのまま張り付ける仮巻を購入するかどうかは自由とし、作品は返却した。色紙、短冊、年賀状等も記念の作品として返却した。
・朱液、筆、墨、紙、など、指導用の消耗品だけでなく、作品制作、展示に必要なもの、たとえば、押印のために必要な遊印、印泥、印褥台、篆刻（希望者）のための印刀、印台、資料、また、学内の展示用仮巻、古新聞、マグネット、のり、カッター台、などはすべて私物を使用した。

◆発表内容（兼レポート）用紙の記載内容（タイプＡ、タイプＢの２種を使用）

【タイプＡ】
１、書いた作品について（どう読むか、どういう意味か、なぜそれを選んだか、難しかった点はどこか）
２、書道について（感じること、発見したこと、もっと知りたいこと、書道は日本語学習に役立つか、日本人の考え方、感じ方を知るのに役立つか、他の授業にはない書道で得られるものは何だと思うか）
【タイプＢ】①～⑫の中から述べたいことを選んでください。
①体験してわかったこと、発見したこと　②書道を通して学ぶ事の中で何が興味深いですか　③漢字と仮名とどちらを書くのが好きですか　④筆とペンでは何がどう違いますか　⑤鑑賞することについて「何か書いてあるのか」という関心と「どう書いてあるのか」という関心とどちらに興味がありますか　⑥日本の小学生が10歳から毛筆書写をすることをどう思いますか　⑦手書き文字は今後どう扱われるようになると思いますか　⑧あなたの国では手書き文字は大切に扱われますか　⑨書道は今後のあなたに影響をあたえますか　⑩書道はどういうことに役立つと思いますか　⑪書道は何かとコラボレーションできそうだと思いますか　⑫あなたは自国で書道を紹介したいと思いますか

第三章　国内外での「書道教育」を目指して

学期末にプレゼンテーションを課していたことは第一章にて既に述べた通りである。「書道」の受講生は、本クラスの履修を通して、書道作品を制作するために必須となる、書に関する知識や技能はもちろん、中国や日本の歴史や文学そして文化の知識など、あらゆる能力を獲得し

て半年（或いは1年）を終える。全15回の授業内では、学生の「書道」に関する感想はおぼろげで、プレゼンテーション時に改めてその結晶となった言葉が、学生たちから語られた。「書道」に対するさまざまな声は、期せずして「書道」という日本文化の特質を浮き彫りにする結果となったわけである。たくさん得られた感想は大別すると以下の四項目に分けることができた。

A　書道の芸術性　　B　書道の精神性
C　書道を通じての日本語・日本文化理解　　D　書道の実用性

A　書道の芸術性

- 書道は漢字を書くばかりではなくて、感情を表します。嬉しいか、悲しいか、書いた漢字に反映されています。その漢字は心の物語です。書くのに精神を集中するとき心は書いている漢字と一体となります。すばらしい経験でした。（2004　ベルギー　Cさん）
- 芸術としての書道作品に興味があります。つまり、ヨーロッパなどでは書いたものが芸術だとされることが珍しいからです。芸術として書道があるのは、とても面白いと思います。（2004　オランダ　P君）
- 書道は日本の美術を代表する特徴があると思います。漢字の意味が分かったら深く感動することができますが、意味が分からなくても、それぞれの作品を見て楽しむことができます。（2004　タイ　Tさん）
- 私には草書が一番書きやすいです。先学期も今学期も草書を書きました。自由な感じを現わすから好きです。自分の気持ちを入れると、面白くてきれいな作品ができます。（2005 USA　C君）
- 書道をしていたこの１年間はとても有意義でした。授業でだんだん技法、工夫を習いながら字の美しさと大切さを発見しました。最初の秋学期で、基本の、カタカナ、ひらがな、そして楷書と行書。最後は草書も習いました。先生が初めて黒板に草書を書いた時、これには感動しました。その後も関心はますます広がり、自分の論文のテーマを変えることにしました。〔中略〕書道には一生かかります。書道は技巧あってのことだけではなく、人の心、精神や感情を反射するので、筆と墨を用いる時には安心でなければなりません。技に夢中になったら、この全体の作品は自分の魅力を失ってしまうと思います。〔中略〕授業で使われた書道分野で使う言葉にも興味を持っています。これは言葉だけでなく、「かすれ」「にじみ」「字の懐」などです。〔中略〕今回の臨書の中では王鐸という書家の作品が一番気に入りました。王鐸の臨書作品を書く時は、自分の気持ちと自分の動きがとても近い感じがします。〔中略〕ブルガリアに帰っても自分の関心が残ったら、書道の専門家になることも今から考えています。（2005　ブルガリア　A君）
- 面白いのは、書道の作品を見る時、色々なことを感じることができることです。それぞれの作品はそれぞれ特別の雰囲気があります。同じ言葉を見ても、人によって考える意味が違います。書道の授業は、きれいに書けるためではなくて、自分が「何」を書いているのかを知るためだと思います。（2008　タイ　Tさん）
- 授業を受けて、初めて、この芸術の難しさが理解できました。想像以上でした。美しさ、微妙な自己表現ができます。（2008　ハンガリー　Mさん）
- 実作をして何を感じたかというと、言葉ではなかなか表現できない気持ちです。実際に色

紙と小画仙紙をつかって作品を仕上げるのは、私にとって難しいタスクであると同時に夢が叶うような機会でした。非常に貴重な体験として、私の心を強く動かしました。自分の雅号を考えること、プロが使う印を押すことまで、すべてがユニークなチャンスでした。（2010　ブルガリア　Kさん）

- 書道を始める前に気づかなかったことは、字の芸術的な側面である。ダイナミックで力強いもの、流れるような優雅さを感じるもの、繊細で奥深さを感じるもの、など、「字」にも絵画のような芸術性を感じた。でもそれを伝えるために、練習が必ず要る。どんなに自分の考えていることを伝えたくても、書道のルールがわからないときれいな字が書けない。はじめは無理だと思っていたがだんだんメッセージが伝えられるような字を書けるようになった。（2011　リトアニア　Rさん）
- 特に興味が湧いたのは篆書でした。簡単に見える篆書は、実際に書くと、難しくなります。しかし、それはその醍醐味であるように思われます。線をしっかりとはっきりさせ、存在感のある字は男らしく、漢字のつくられた大昔の空気が感じられます。この授業の内容はほとんどのことが新しく、すべての授業の中でも好きなものでした。（2012　ハンガリー　A君）
- 書道を通じて文字の「美しさ」を解せるようになりました。ただ意味を伝えるものだけではなく、美術的なものだと思います。（2015　オーストラリア　T君）
- 具体的には、ほとんどの人は整ってみなれている楷書を好みます。草書で書かれたものは変で、書道作品として失敗ではないかとつい思ってしまいます。でも、私の経験では、実際に体験した上で、そういう考えを考え直す人が多くいます。また、自分の性格に合う書き方だけでなく、全然違うものを選んで学ぶ、というのもいいと思います。この実験は、書道の腕を上げるだけでなく、精神的な成長にも意義があると思っています。観賞できる美の形の多様性が高くなるからです。（2017　ブルガリア　Yさん）
- どうしてこんなに難しいのだろう。〔中略〕筆にどれだけ墨をつけて書きはじめるか、どのあたりから書きはじめるか、行はゆがんでいないか、文字の大きさの変化はできているか、墨継ぎの場所はどこにするか、かすれない場合、どこで墨を減らす工夫をするか、文字の崩し方は間違っていないか、次の字のつながりはうまくいっているか、書くスピードはいいか、のように、色々、発見はあります。お手本を見て、自分の字を見て、それぞれの文字の何が違うのか、文字を観察して分析する必要もあることに気づきました。（2017　タイ　Nさん）

B　書道の精神性

- 不思議に思ったのは、心と手が関係していて、心の状態によって作品の出来が違うということです。ほとんどの場合、書道をしていると、心が安らぎになるので、私は書道が大好きです。（2004　ミャンマー　Tさん）
- やっと分かったことは、先生のまねをすることではなく、指導と作品の手本から美を身に着けて、自分が感じる通り書くのが、効果がある。（2005　ブルガリア　P君）
- 墨を磨りながら、心が落ち着き、自分の考えも柔らかくなると感じましたし、漢字の歴史も面白かったです。（2012　ハンガリー　A君）

- 書道を練習すればするほど分かってきたのは、手が筆の動き方に慣れてくるために、ちゃんとルールを守って書かなければならないが、時が経つにつれて、さらに綺麗にするために、そのルールから少し抜いて自分の心、つまり、楽しんで書くと、字がきれいになると思われます。最初に私は、なるべく手本に沿って書いたが、もっと自由に書いた時、字が綺麗になる気がしました。宿題がたくさんあって、たいへんでしたが、努力の甲斐がありました。フランスに帰っても絶対に練習を続けたいです。（2013　フランス　Eさん）
- 私はずっと芸術が好きです。13歳の誕生日に墨絵と書道の本をもらい、この本でアジアの書道を始めて知りました。私にとって、絵を描くのと字を書くのは同じ感じです。心配や苦しみなどを忘れることができます。精神を集中することができて、ストレスの解消もあります。穏やかで、忍耐強くなります。全身で書かなければいけなくて、字を書くのは瞑想のようです。私の国フランスでは、ゴシックやロマンなど、ラテンの字体は本当にきれいですが、国の文化がちゃんと伝わっていないのは残念なことです。（2008　フランス　Iさん）
- 筆で字を書くとき、心がリラックスします。疲れている時や気分のよくない時に、書道を少しでもしたら、気分がちょっと良くなるから授業のためだけでなく、自分のためにも書道をするようになりました。（2009ポーランド　Dさん）
- 私はいくら大事なことでも、それをしながら同時に何か別のことをしないと落ち着かないという癖をもっている。ところが書道で、それは行き止まりにあった。自信とやる気を失った私は、「とにかく今の私の能力はこれだ、これしかできない」と自分に言い、筆をとった。いつもの私のように「綺麗に書きたい」という考えはなく「書けるだけを書いてみる」と心に決め、お手本の一つ一つの部分を「ほんとうに、見て」、そして「頭には何もなく、頭ではない別のところで書いていた」私だった。そして、そこで初めて実感できたのは、「ああ、これがいわゆる集中ということだな」ということだった。それ以来、なかなか心が落ち着かない私は書道のおかげで実感できたこの集中、一瞬の和を、自分に感じさせたいと思っている。（2010　イラン　Tさん）
- 書道の授業を受けてよかったと思う。勉強になったことはもちろん、リラックスにもなった。日常のことについて考えないで、自分が書きたい字だけに集中し、書道の世界にふけるのは楽しかった。（2011　リトアニア　Rさん）
- 日本文化には着物、相撲、茶道などあるが、私にとっては書道が一番魅力がある。それは心の状態に関係する。どのように上手く書くかに集中し、自分で限界を壊し、自分の字がだんだんよくなるという嬉しさを感じる。そして心地がよくなる。几帳面さも高めるようだ。（2016　ベトナム　Qさん）
- 私は、以前、座禅と茶道の体験をしたことがあり、そこでは背筋を伸ばして姿勢を正す「調身」、呼吸をととのえゆっくりと時間をかけていきを吐く「調息」、姿勢を正して呼吸を整え迷い事を消す「調心」の３つが重要だと学びました。書道にもこの３つが必要であると、自然に学ぶことができたので、書道はこのような日本人の考え方を知るのに役立つと思います。「落ち着き、集中する大切さ」は書道だけでなく、他の様々なことに当てはまると思います。どんなことにも取り組む前には落ち着いて、ゆっくりと集中することが大事だということを書道から学びました。（2017　スペイン　Jさん）

- 書道をして感じることは、姿勢を正し、心を正して集中するので、瞑想している時のようなしんとした静けさが広がります。（2017　タイ　Nさん）
- 書くときに、精神統一します。この精神統一は、他のどの科目にも役立ちます。生活にも役立ちます。（2017　タイ　Nさん）
- 書道を通じて私達は自分の勤勉により我慢強くなり、忍耐力をつけることができます。判断を早くすることができるようになります。見て聞いたことを分析する洞察力を身に着けることができます。美をみつけ、美を評価し、美を創造する方法を学べます。〔中略〕自分自身の制御と正しさを取り戻すことができます。人の魂を練習する方法です。〔中略〕伝統文化を尊重し、歴史や他の古典的な作品に対する意識を高めることができます。私は歌や絵が下手ですが、書道の作品を作ることができました。私にとって一番嬉しいのは、書道が私を喜ばせたように、書道が人々に喜びをもたらすことです。（2018　ベトナム　Dさん）
- I like to study but I also, always wanted to do something with my hands. Shodo seems to be the perfect combination of both.〔中略〕The strokes are weak and fast, strong and rich. This reveals the many different spectrums of human emotions, inhabited in everyone of us and the way we can see them.〔中略〕it really discovered the “Zen” aspect of Shodo foe myself. When I am back home, I wish for myself, that Shodo has become something that is accompanying me through the rest of may live. This way I’m sure, the live of mine would become a richer one.（2018 ドイツ　L君）
- 自分の手で自分の感情や伝えたいことを書くことは、自分の心を深く見つめる時のはずです。ベトナムでは手書きは大切です。どんな時代でも手書きのものは特別な意味を持つと思います。（2019　ベトナム　Tさん）
- Shodo can be helpful in our lives. The first, it promotes relaxation relieving as a consequence tensions in our society. We can just stop the time and live the moment with our dear introspective self and our emotions. It is clear that it is use also for meditate and recreate that feeling of appreciation of this beautiful life. Moreover, Shodo can be also used for save the moment we are living in time, expressing ourselves saving our feelings and state of mind in those few words or meaningful sentences. At last, I can mention the ability of enhancing creativity and make easier to express our desire and in case of a troubled mind.（2019　イタリア　A君）

C　書道を通じての日本語・日本文化理解

- 書道は日本文化の一番魅力的なものだと思います。私は日本の思想、とくに仏教の思想や歴史に興味があります。書道は仏教と共に日本に伝来した関係もあります。書道の芸術性は世界で認められています。（2008　ハンガリー　Mさん）
- 『源氏物語』や『枕草子』で見た筆の文字が急に私の目の前に生き生きと話し始めました。今までまったく理解できなかった美しさが、急に意味でいっぱいになりました。道具をもらってゾクゾクしました。自信を失い、失望しつつ、墨の香りや、筆の音や、白黒の対照など、日本の魂がここに住んでいる、とよく感じました。（2010　ブルガリア　Vさん）
- 仮名が生まれた由来の形を見て、本当に感動したのです。想像もできなかったほど驚きま

した。草書や変体仮名をもっともっと勉強したいと思います。（2012　インド　Nさん）

- 私は書道史上の平仮名の誕生について研究をしてきましたので、鎌倉時代までの文字の歴史や当時の仮名作品も見てきました。それで空海や小野道風などの作品はとても典型的な書の遺品だと思っていましたが、この授業では自分で試みることができた結果、そのような作品の難しさがようやく理解できました。平安時代の華やかな書風も興味深いですが、これからは中世ごろに生まれた禅の書風と、その歴史についても知りたいと思います。〔以下略〕（2012　ルーマニア　Dさん）
- 文字の歴史を勉強できてよかったです。日本語の基本だから勉強する必要があると感じます。留学生や外国の日本語授業で、もっと詳しく書道や文字の歴史を教えたらいいのに、と思います。「一生」と行書で書きました。かなり好きです。速く書くと形が色々に変わりおもしろいです。「一生」の訓読が色々ありますが、それも好きです。私は「命が一つしかない」という意味が特に好きです。（2014　オーストラリア　T君）
- 崩し字の授業とともに、書道の授業もうけて、文字の歴史もある程度分かってきました。特に興味がある所は、時代を通じてどのように使われて、文字が進化したかということです。例として、平仮名は元々女性がよく使っていたということを知ると、平仮名の優しさを解せます。平仮名の進化をもっと知りたかったので、今学期は平仮名ばかりに書きふけようと思いました。それで『十五番歌合せ』と呼ばれる和歌の臨書をしました。草仮名というスタイルでした。（2015　オーストラリア　T君）
- 私はやはり平安時代の女のように、漢字よりも平仮名の方が好きで、書きやすくて面白いと思います。和歌を筆で書くと、まるでタイムマシンに乗って『徒然草』が書かれた時代に戻るかのようで、それが書道の魅力の一つだと思いました。「時空」という言葉を作品にしたのは遠くから来た留学生にふさわしい感じがします。書道は時間をかけて書くので、思わず、その字でできている言葉について考え始めることです。私も「時空」と書きながら、「人にとって時間って何でしょう」と考えていました。「日進月歩」を書いた時もそうです。実は何もできない日々でも未来とつながっているので、絶望しなくてもいいと思うのです。神道によると「言霊」というものがあって、言葉が力をもっていて、現実の世界にも影響を与えることができるとされています。色々な言葉を書くことによって、自分の考え方も変えられる、と言えるのでしょうか。（2014　ウクライナ　Iさん）
- ローマ字、キリル文字、アラビア文字、シンハラ文字、タイ文字、漢字、どの国でも歴史の深い自国の文字が大切にされている。日本では多くの国とくらべると、文字が重視されている。なぜそう言えるかというと、書道が存在するからだ。若い頃から書道を習い、日本の文字の歴史や書体の変遷も学ぶとともに、文字に潜んでいる力も理解していく。その一日一歩の努力が大事だということも学べる。それは私自身が学んだことでもある。私は日本語学習が９年目になるが、書道を通して、より深く日本の文化や思想を理解できた気がする。母国ロシアでは、日本文化は人気が高く、日本語学習者以外にも、映画やアニメ、美術、武道を通して、日本文化を知ろうとする人が多い。日本の文字を美術作品として鑑賞する人もいる。漢字のタトゥーをしている人もいる。彼らに書道の特徴や、文字の本物の力、その価値を理解してもらいたい気持ちで心がいっぱいである。日本語学習者も、日本文化のファンも、書道を通じて、日本の文化をより深く理解して、自分自身を磨くこと

ができると、私は信じている。（2016　ロシア　Mさん）

- 歴史や様々な知識を身に着けた。歴史が分かれば、価値を理解し継承する意識も高まるだろう。勇気を出して受講してよかった。（2016　ベトナム　Qさん）
- 書道を通して色々な文学の分野、和歌、俳句や百人一首などについても勉強することができた。書く言葉から、日本人がもっている歴史と文化を重ねてたどりついた現在の日本がその両方を大切にしているということなども分かった。他の授業では日本の伝統的な文化について学んだことはあるが、直接的に体験しながら学ぶことができたのは、書道の授業だけであった。（2017　インド　Sさん）
- 他の日本の技術や芸術と同じように、書道には能力より練習が大切である。西洋とは本当に違うので、最初はびっくりした。もしかしたら「能力より練習」という思想は、日本の文化を反映しているかもしれないと私は思う。（2018　ドイツ　Eさん）

D　書道の実用性

- 集中すると手が震えますが、書道のおかげで漢字が覚えやすくなりました。（2004　オランダ　P君）
- 書道で練習した漢字は、よく覚えられます。その漢字の深い意味も理解できます。（2004　ドミニカ共和国　Jさん）
- 集中して筆で書くことで、字の細かいところまで意識して見るので、早く文字を覚えるのに役立つと思います。難しい漢字の読み方を知ることにも役立ちます。とめ、はらい、はねを意識して何度も書くことで、普段の文字もきれいに書くことができます。（2017　スペイン　Jさん）
- 漢字の書き方や意味などを書きながら考えながら書くので、難しくてもストレスなく字を認識できるようになります。漢字の意味や語源を知ることもできます。（2017　タイ　Nさん）

以上、レポートの一部を紹介した。日本語で書かれた内容よりも、はるかに深く書道を理解している学生も多くいた。言葉にはし尽くせないながらも、多くの事を体感し、また目で見て体験し、「書道」というものをまさしく身をもって学んだ学生も多くいたことを、最後に記しておきたい。

おわりに

通年「書道」のクラスを受講した学生については、半年終了時点と一年終了時点での感想に変化が生まれていることがこのたびわかった。半期の授業を終えた時点での発表では、書かれた題材の字句説明と、なぜその言葉を選んだかということを多く語る傾向にあった。書道についての発見、疑問、今後の希望などは、ほぼ予想がつくような、簡単なものが多い印象であった。通年履修をする学生は、すでに再受講開始の時点で、すでに字句の内容よりも、書かれた書体、書風、テクニック、などを見るようになっていた。「書道の作品には何が書いてあるかよりも、どのように書いてあるか、が大切だと思う。なぜなら、言葉の意味はどんな道具でも伝えることができるが、筆を使うと気持ちも伝えられるから、その特徴を利用した方がいい。

(2018　ネパール　R君)」と考えだした学生もいた。

一般的に、書作品は、「どういう詩歌を書くか、どの文字を書くか」という「撰文」と、「どういう書風でどういう風に仕上げたいか」というイメージとの双方が両輪となって制作される。留学生が半年の受講を終えた時点ですでに、「何を書くか」ということよりも「どう書くか」という表現に気持ちが移行しつつあることは、大変興味深い事実であった。

留学生に何を教えるべきか。書道は芸術の一つであると言いつつも、たくさんのルールがあり、それをどこまで強要してよいのか正直なところ迷いもある。

たとえば、姿勢について「背筋を伸ばし、肩の力を抜き、右ひじは高く、左わきは広げて左の掌は斜めに置く」と指導する。これは、こうした方が筆が立ち、体の前の空間も広くなり、豊かな気持ちを生むことができる、と伝統的に継承されてきた「型」であろう。紙を体に対してまっすぐに置く、ということは、縦にまっすぐであることを目で感知するために必要であるが、斜めにして書く癖のある学生は、何度まっすぐに直してもすぐ斜めになる。身体の位置を紙の中心に置くことも難しい。これはやはり教えたいことの一つだ。

手本の形を真似る「臨書」という行為においては、「ここが違う、あそこが違う」と見ることができていない箇所、あるいは分かっていてもできない箇所を指摘することになる。ある学生は、「書道はコピー（模倣）ばかりだ。自分はコピーはしたくない。自由に書きたいのだ」と最後まで主張した。書道に「真似る」という行為がどういう意味を持つのか、臨書がなぜ必要なのか、ということを、当初に丁寧に説明しなければならないことを痛感した。ある日本人若手アーティストが「花」という字を100通り書いた。彼は一枚一枚工夫を凝らしそれぞれが異なるように100通りの作品を書いたつもりであった。しかし、書家から見れば、それらはすべて彼の一定の軌跡、リズムに縛られた一種類のものでしかなかった。そこで、古典法帖の「花」をいくつか臨書させてみた。明らかに表現の幅は広がった。こういう話をわかりやすい日本語で話すことも必要であろう。

いつも細い字で、小さく字を書く学生がいた。「もう少し大きく、強く、書きましょう」と指導する。彼女のレポートには「内向的な私はなかなか大きく書くことができません。無理して大きく書くと、なんとなく心の底から何かがもれてしまうような気がしたり、偉そうな態度をとっているような気もしたりして、不快な気分になってしまいます」と書かれていた。とはいえ、「書道を知ることができただけでなく、自分自身についてよくわかるようになって、個人的には成長できたと思う」と締めくくられていたことは印象深かった。

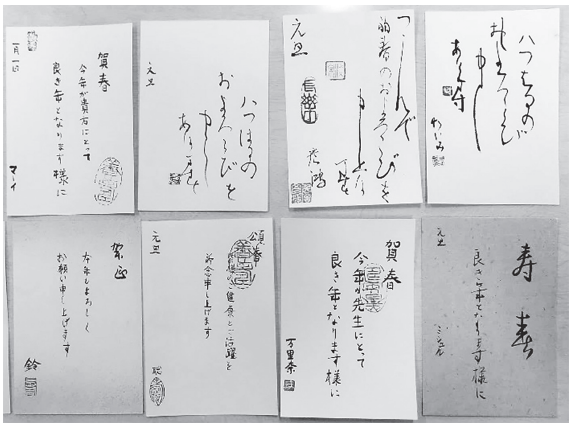
帰国後も書道と関わりをもつ学生たちについて述べよう。一番に挙げておきたい例は、ブルガリアのソフィア大学における現地での主体的な書道の活動であろう。CJLCで「書道」クラスを受講したソフィア大学からの留学生は合計34名（実際には再受講をしているので実数は25名）であった。2003年ころから数年間に留学していた学生は、配布された教科書と、授業のために購入した筆、墨に加え、自費で書道道具（硯、下じき、文鎮など）を買い足して持ち帰り、大学で書道クラブを立ち上げた。その後、彼らの活動は引き継がれ、CJLCの書道受講生にブルガリアの留学生が欠けたのは17年間で３年だけであった。大阪大学へ留学するならば「書道」を選択せよと先輩から聞いてきました、とのことであった。その先輩達の力によって2013年来阪のK君は書道のさらなる研究者となるべく、現在日本の大学の修士課程（美術教育書道）に在籍し、書道の研究を続けている。

ウクライナからの受講生（2003年　Gさん）はキエフの日本文化センターにおいて「書道」の講師となり、今も毎年書道展を開催している。そこで育ちつつある生徒達を連れて今までに数回、筆者のもとへ書道研修のため来日している。

ポーランド、ハンガリーからもほぼ途切れることなく受講生を毎年迎えた。先輩から習いました、という声も聞こえたが詳しい帰国後の活動については聞き及んでいない。事実、帰国後の活動例をたどり寄せることは困難である。しかし、まとまったサークル活動のような継続がなくとも、一人一人が新たな伝道者として教科書と道具を持ち帰り、「不便なのは先生と紙が無いことです」と訴えてくることは書道を海外でも鑑賞、理解してほしい、という筆者の熱い思いが伝わったものと理解している。引き続き、日本伝統文化としての「書道」を、日本から発信してゆく難しさを抱きつつ、将来の可能性につなげてゆきたい。

最後に特に印象にのこった秀作、力作を紹介する。

【秋～冬学期】（来日から半年間の成果）

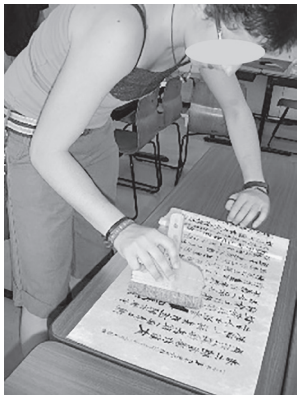


↑　毛筆を始めて 6 週目　年賀状

2016年 2 月
小画仙紙作品（黒板に掲示）と
色紙作品（黒板下段に配置）
15週目の発表会　↓

【春～夏学期】

↑　2012年 2 月
15週目の発表会



↑　2006年 8 月　王羲之「蘭亭序」全臨
イタリア　Ｅさん

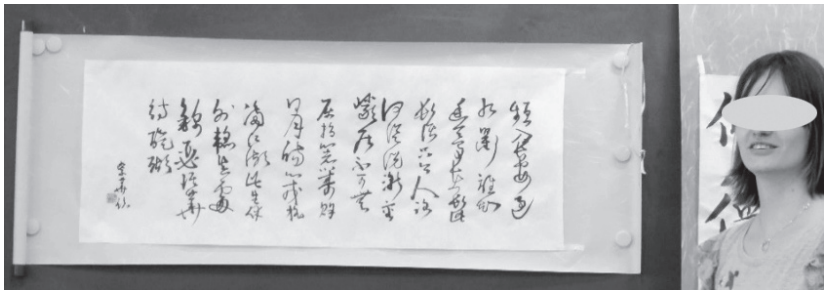
←　2007年 8 月　王羲之「蘭亭序」全臨
ポーランド　Ｇ君

↑　2019年８月
春～夏の授業は、秋～冬受講した継続の学生と、
初めての学生の複式となる。
15週目の発表会

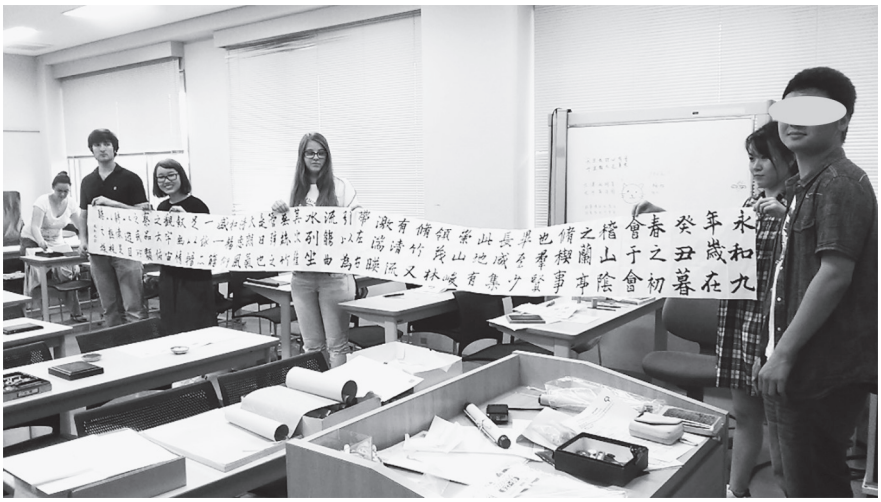
↑　2018年８月 いろは歌
スイス　Mさん

←　2017年８月
古代の青銅器の文字
ミャンマー　Aさん

↑　2018年８月
スウェーデン　A君

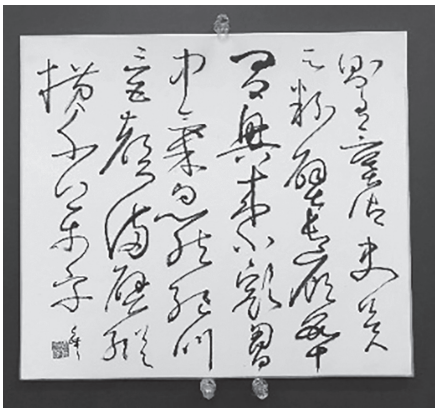


↑　2012年８月
王鐸の巻子作品を臨書 ドイツ　Kさん



← 2017年８月
「蘭亭序」臨書
中国Ｋ君

← 2017年８月
（左）イタリア　Ｆさん
（中）スウェーデン　Ａ君
（右）タイ　Ａさん



2019年８月
懐素「自叙帖」臨書　→
オーストリア　Ｔ君

← 2018年８月　和歌
台湾　Ｋ君

（ふくみつ　けいこ　本センター非常勤講師）